

中学校スクールカウンセラーのコンピテンシーモデルの検討 —スクールカウセリングの課題の明確化—

An Examination of Competency Models for Junior High School Counselors
—Identification of Key Issues in School Counseling—

浜本 佳奈

Kana Hamamoto

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：中学校，スクールカウンセラー，コンピテンシー，コンピテンシーモデル

Key words : Junior high School, School counselor, Competency, Competency model

1. 研究目的

文部科学省は平成7(1995)年度から，児童・生徒や保護者の抱える悩みを受け止め，学校におけるカウセリング機能の充実を図るための方法の一つとして，スクールカウンセラー（以下SC）制度の運用を開始し（文部科学省，2007），30年が経過した現在は，SCは学校に勤務する心理的支援の専門職として認知されている．一方，SCに関する課題は数多く挙げられており，文部科学省（2007）は課題の一つに，SCの資質や経験に違いがみられることを挙げている．

岩壁ら（2018）は，臨床家の資質向上のための訓練制度を整えることについて「現場の臨床家に求められているコンピテンシーやニーズを調査して課題を明確にすること」の重要性を指摘している．SCの資質の向上・均等化を目指すにあっても，SCに求められているコンピテンシーやニーズを調査し，スクールカウセリングの課題を明らかにすることが求められる．また，SCへのニーズを検討する上では，特に児童・生徒とのかかわりが多い教員が，どのようにSCを理解し，何をSCに求めているのかについて明らかにすることは重要である．

そこで本研究は，SCのコンピテンシーについて「スクールカウセリングにおいて効果的な支援を提供する人の根源的特性」と定義し，SCの視点と，教員の視点との比較から，中学校SCのコンピテンシーモデルを検討することで，スクールカウセリングの課題を明確化することを目的とした．

2. 研究実施内容

—1 方法

調査対象者：東京都・神奈川県の公立中学校SC4名および，東京都・神奈川県の公立中学校の教員5名．類似研究（金沢，2014）を参考に，経験年数が3年以上の者を条件とした．

調査期間：2024年5月～8月

調査方法：半構造化面接法によるインタビュー

調査内容：【SC】SCに求められると思うこと，【教員】SCに求めることについて

分析方法：SCおよび教員へのインタビューデータについて，それぞれ修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）を用いて分析を行った．

尚，本研究は大妻女子大学研究倫理審査委員会の承認（番号：05-043）を受けて実施された．

—2 結果と考察

SCに求められることについて，SCは“専門性を発揮するためにどのように働きかけるか”という点を意識していることが示された．また，SCに求めることについて，教員は“SCの専門性をどのように発揮してもらうか”という具体的なニーズに重きを置いていることが明らかとなった．

次に，SCと教員それぞれのM-GTAによる分析の結果から，SCのコンピテンシーの抽出を行った．結果，《心理職的態度》，《自己意識・自己理解》，《専門的知識+α》，《伝わりやすさ》，《社会人的振舞い》，《勤務校の風土の理解》，《学校の動きや考えの理解》，《SCの持つ様々な立場の理解》，《学校・

生徒主体の支援体制》,《SC 役割の明確化及び周知》,《支援体制の強化・拡充》,《各所との連携》,《情報の適切な共有》,《専門性の伝授》の14個のコンピテンシーが抽出された。また、前者9個を「SCの機能コンピテンシーに共通する土台となるもの」であるSCの基盤コンピテンシーに、後者5個を「スクールカウンセリングにおける心理専門職の業務を質の高いレベルで行うことのできる資質・能力」としてSCの機能コンピテンシーに分類した。

そして抽出されたSCのコンピテンシーについてモデル化を行った(図1)。結果、マクロな視点では基盤コンピテンシーを土台として、機能コンピテンシーが発揮されていくこと、またコンピテンシーがニーズに向かって発揮されていく流れが示され、SCは多様なニーズに対応するために、学校で働く心理職としての態度や姿勢を身につけ、SCの専門性を適切に発揮していくことが求められるとした。これは、“SCの専門性をどのように発揮してもらうか”という具体的なニーズに重きを置いた教員の視点に近いものであると考えられる。一方ミクロな視点では、SCの基盤コンピテンシーとSCの機能コンピテンシーは、影響し合う関係性を示し、SCは日々の活動の中で、それぞれのコンピテンシーを高めていく姿勢が求められるとした。これは、“専門性を発揮するためにどのように働きかけるか”を意識しているSCの視点に近いものであると考えられる。

本研究では、スクールカウンセリングに関する課題として、主に配置頻度の増加とSCの役割の明確化の2点が挙げられた。今後、SCに頼れる機会

として勤務の頻度の増加や、SCが担う役割が明確に示されることで、教員のみならず、生徒や保護者がSCを頼りやすくなること、よりSCの活用の幅が広がることが期待される。

3. まとめと今後の課題

本研究で導出されたSCのコンピテンシーモデルは、今後SC自身の自己洞察や振り返りのツールとしての活用やSCの研修制度への応用が期待される。また、今後の展望として、SCの発達段階ごとのコンピテンシーの検討や、スクールカウンセリングに関わる他の専門職など、幅広い視点を取り入れることでより、応用性の高いものとしていくことが求められると考えられる。

主要参考文献

- [1] 元永拓郎 (2024). 日本における心理専門職養成に求められるコンピテンシー概念. 公認心理師: 実践と研究. 3(1), 26-33.
- [2] 岩壁茂・奥村茉莉子・金沢吉展・野村智子 (2018). 心理職の『実践的総合力』の習得に向けて—資格取得後の高度対人援助専門職育成プログラムの開発. 公益財団法人明治安田こころの健康財団 (編). 50周年記念研究助成論文集. 1-43.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和6年度大学院生研究助成(B)(課題番号DB2425)「中学校スクールカウンセラーのコンピテンシーモデルの検討」を受けたものです。

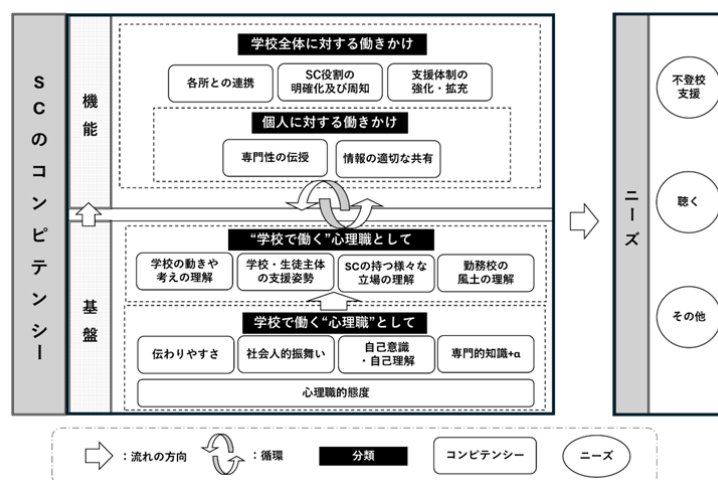


図1. 中学校 SC のコンピテンシーモデル